Optics Japan '99 参加報告

岡　田　佳　子
（電気通信大学電子工学科）

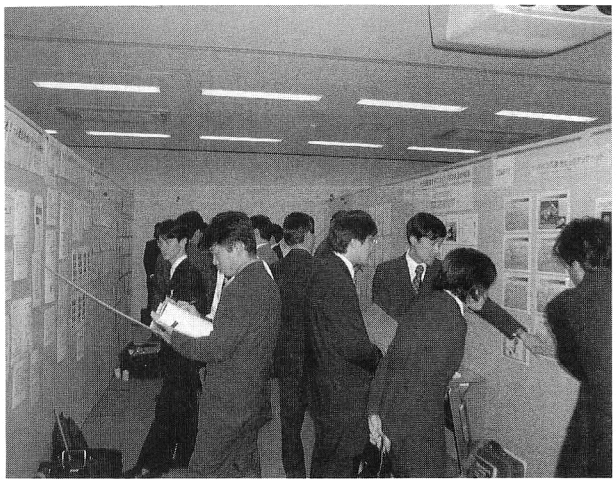
Optics Japan（前身は光学連合シンポジウム）は，やや肥大化した応用物理学会講演会から分離して運営される日本光学会独自の学術講演会であり，秋の応用物理学会とリンクして開かれるのが常であったが，Optics Japan '99 は応用物理学会から2か月余離れて，11月23日から25日の3日間，大阪大学コンベンションセンターで開催された．河田聡実行委員長（大阪大学）の報告によると，200件を超える発表と480名の参加者があり，両者ともに前回より増加していることから，離れたことでむしろ講演会の独自性が際だったとも考えられる．

今回の講演会は，従来のOptics Japan あるいは応用物理学会講演会とは違った特徴を出すさまざまな工夫がみられた．まず目新しいのは，クレジットカードによる事前登録である．国際会議では当然のように用いられているが，国内学会ではあまり利用されていない．利用率によっては今後も継続してほしいものである．また，参加証や会場の機能性，雰囲気が国際会議を彷彿とさせ，応用物理学会のサテライト講演会というイメージを刷新した感があり，実行委員会のセンスと意気込みが伺えた．

講演会の特徴は，パラレルセッションを避けるために，公募型シンポジウムおよびプレナリー招待講演のみを口頭発表で行い，一般講演をすべてポスターセッションとしたことにある．シンポジウムは，主題がしぼられていたためであろうか，活発な議論が交わされる大変有意義なものとなった．

従来から，日本光学会の各研究グループが主催するさまざまなスペシャルセッションが開催されてきたが，今回は研究グループによる提案以外に，トピックス的な話題として集中的に討議されるテーマが取り上げられた．「光誘起による微細配向構造の制御」，「周期構造と共鳴効果による光デバイス」，「時間空間発展する波動場の像形成」などがそれである．このようなトピックス的な話題は，他学会会員からも注目され，参加者を集めていたので，今後テーマを変えつつ発展的に開催されることが望まれる．

一方，会員によるプレナリー講演は，招待の形がとられ，参加者が常に一堂に会して討論し，情報の交換をし，そして親交を図れるよう配慮されていた．海外から，および他学会からの招待講演は，大変興味深く，光学会の外の話題を知ることができた．またプレナリー講演によって，光学の中でこれからの発展を期待できる話題にも触れることができた．



ポスターセッション風景

ポスターセッションでは，比較的狭い部屋だったことが幸いして，活発な議論が展開されていた．またポスターは，セッション以外の時間帯にも掲示されており，時間外にも余裕をもって見ることができた．できれば今後も，パラレルセッションを避ける方針を続けていただきたい．

シンポジウムで残念だったのは，講演時間が応用物理学会と同じ10分になったこと，シンポジウムと一般講演の違いが，いまひとつ明確でなかったことである．シンポジウムのテーマをどのように選定するか，難しい問題ではあるが今後の課題になるだろう．

最後に，Optics Japan '99 の企画・運営にご尽力くださった実行委員，プログラム委員の皆様，および無報酬でプレナリー講演をしていただいた皆様に，参加者の一人として深く感謝いたします．　(E-mail: okada@ee.uec.ac.jp)